



からおり きくむら
唐織 菊叢文様

黒紅地 江戸時代

浅井能楽資料館 佐藤芳彦記念 山口能装束研究所蔵

能の舞台で演者が身につける装束は、当初は日常の衣服を用い質素なものだったと言われていますが、次第に豪華なものが用いられるようになりました。中でも「唐織」は、袖口の小さい小袖形式で、女性役が着用する最も華やかな表着です。金や銀の平箔（和紙に金銀箔をはりつけて細く裁断したもの）を織り入れて地文様を表したうえに、様々な色系で上文様を織りあげます。立体的な文様は刺繍のように見えますが、織物の技法です。

この作品は、群生した菊の文様が空間を埋め尽くしていますが、色彩の処理が見事で圧迫感を与えません。秋草を好む能装束の文様の典型でもあります。また地文様がなく、唐織の特徴である重層的な表現が見られません。唐織がようやく完成された時期である桃山時代の作品の特徴に、地文様と上文様の未分化がありますが、その趣を感じさせる作品です。（特別展「近世能装束の世界 用の美—武家貴族の美意識」にて展示）

特別展

近世能装束の世界 用の美—武家貴族の美意識

2021.7.17(土)~9.12(日)

室町時代初期に大和猿楽・結城座の観阿弥・世阿弥親子によって大成された「能楽」は、江戸時代に至って武家式楽としての地位を確立しました。同時に江戸時代には、上質な国産生糸の生産体制と高度な染織・製織技術が成立し、武家の教養と美意識が反映された格調高く優美な能装束の生産が可能となりました。今回は、浅井能楽資料館 佐藤芳彦記念 山口能装束研究所の協力により、室町時代後期から平成までの能関係資料をご紹介します。

能楽は専用の能舞台で演じられますが、この舞台は極度に簡略化されており、大掛かりな舞台装置や小道具は使われません。そんな中、演者が身につける能装束は、役柄の性別・年齢・身分・職業など、様々な情報を伝える役割を担っています。



[写真1]
能面 節木増
河内家重作
江戸時代初期

能装束は、能面や冠り物・鬘・帯類・足袋・中啓等演者が身につける道具全てを含みます。その中でもまず能面を思い浮かべる方も多いことでしょう。能を大成した世阿弥（1363?~1443?）の時代には、現在使用される能面の主なものはほぼ出揃っていましたが、その用法は流動的でした。能の式楽化・制度化に伴い、固定化されていったと考えられます。江戸時代

初期までに完成していた能面はおよそ85種類です。写真1の面は、気高く神聖なイメージの女性面「節木増」です。これは、シテ方の流派のひとつである宝生流の専用面です。「小面」と同じく「井筒」や「野宮」のような若い女性の役に用いられます。

無表情な顔を「能面のような…」と表現しますが、実際には逆で、能ではやや仰向けにする高揚した様子（照ル）、少しうつむくと陰りのある様子（曇ル）を表現します。わずかな角度の違いでシテ（主人公）の心の内を表現するのです。ぜひ展示室では、正面以外からの角度でもご鑑賞ください。

次に身にまとう装束に目を向けてみると、こちらは20種類程度と少なくなっています。その代わり、多様な文様や色彩で役柄を表現しています。着用する箇所（着付類・表着類・袴類・その他小物類）にわかれ、性別や年齢・社会的な身分などで出立（コーディネート）が定められています。

舞台上で観客がまず目を留めるのは、表着でしょう。中でも女性用の装束である唐織は、最も華やかで豪華なものです。



[写真2] 唐織
夕顔扇秋草牡丹文様 紅地胴箔 江戸時代

写真2は、全面に金箔を織り込んだ胴箔地で、上文様として夕顔と扇子が表されています。扇面が並んでいますが、色違いにすることで単調感はなく、変化を見せています。夕顔と扇面の組み合わせからは、『源氏物語』の夕顔の巻が

連想されますが、位の高い役の装束なので「江口」や「野宮」のような役に用いられます。



【写真3】^{あついたからおり}厚板唐織
^{いしだたみ きりもん}変り石畳に桐紋散らし文様 白地 江戸時代

次に紹介する「厚板唐織」は、織組織や技法などは唐織と同じですが、大ぶりの文様を用いており、男性役の表着のほか、着付・腰巻に用いられます。写真3は、石畳地に桐紋を配したデザインで、石畳の下地を紫と萌葱の絵緯糸で段替わりにするこだわりが見られます。桐紋の花が大きく桃山時代風ですが、葉は柔らかに垂れ気味で、江戸時代の特色がうかがえます。花の左右の動きを変化させ、色彩を変えていることが趣を生んでいます。

最後にご紹介する「摺箔」^{すりばく}は、これまでの作品と異なり、着付（下に着る着物）として用いられます。摺箔という名前は、型紙を用いて布にのりを置き、その上に金銀箔をのせて文様を表す技法の名称から来ています。特に嫉妬や執着心を表す役には、写真4の様な鱗文様（三角形が連なる文様）の摺箔を用います。後場でシテが般若の姿となる「葵上」では、シテは前場から鱗文様の摺箔を身に着け、その心情を表現します。

また、摺箔に更に刺繍を加えた縫箔^{ぬいはく}は、非常に華やかな文様があらわされます。長絹や舞衣（舞を舞う天女や女神などに用いる）といった表着の下に腰巻にして着用しますが、その場合上半身は見え、裾部分にチラリとのぞきます。



【写真4】^{すりばく}摺箔 鱗文様 浅葱地銀箔 平成

現在では着付として用いられる縫箔ですが、唐織が普及していなかった安土桃山時代から江戸時代初期においては、最も華やかな装束として、表着として用いられていました。

能装束には、長年使われることで生じる褪色や劣化により、より美しく趣深くなるとする考え方があります。とは言え、江戸時代の能装束を復原する行いは、既に明治時代の初めに行われていました。この背景には、貴重な美術品の写しを作成する意識もあります。本展覧会では、浅井能楽資料館 佐藤芳彦記念 山口能装束研究所 山口憲氏が平成に復原した装束も、併せてご紹介しています。能装束が作成された当時の材料や技術への深い理解に支えられた復原装束と比較することで、用いられる美である能装束の世界をお楽しみください。

(*) 掲載作品はすべて、浅井能装束研究所 佐藤芳彦記念 山口能装束研究所所蔵作品です。

【展覧会情報】

前期：2021. 7. 17（土）～8. 15（日）

後期：2021. 8. 17（火）～9. 12（日）

* プロの能役者による装束着付実演や、出品者による解説など、関連イベントを予定しています。最新情報は、岐阜市歴史博物館ホームページをご確認ください。

加藤栄三・東一記念美術館

加藤栄三・東一 鵜飼を描く

2021.7.27(火)～10.24(日)

一年を通して「鵜飼を描いた作品はいつ展示されますか。」という問い合わせがよくあります。花鳥や風景、風物を題材にした作品を多く描いてきた栄三・東一ですが、中でも岐阜の風物である鵜飼を描いた作品は人気が高いようで、来館者から展示時期についてよく質問を受けます。毎年、5月11日の鵜飼解禁日の前後に鵜飼をテーマにした企画展を鵜飼が終わる10月頃まで開催しています。

本年度、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、長良川鵜飼の開始が延期されましたが、当館で開催される企画展では、例年どおり、長良川鵜飼が開催される時期に合わせ、二人が描いた鵜飼作品を展示します。



涼 (総がらみ) 加藤栄三

時代をリードする諸作家によって描かれてきた「鵜飼」を、いつかは描いてみたいと考えた栄三は、生涯に500枚ほどの「鵜飼」を描いてきた日本画家、川合玉堂かわいぎょくどう宅を訪ねます。川合玉堂は愛知県木曾川町出身ですが明治14年(1881)からしばらく岐阜の米屋町に住んでいました。栄三にとっては郷里の師として、是非とも教示を受けたい人物であったのでしょうか。そんな栄三に玉堂は、鵜から写生を進め、川の流れ、鵜匠と写生を続けていく勉強方法を教授しました。これは物の構造や生態、成り立ちを

分野別に理解することが重要であることを伝えなかったのでしょうか。そして、それ以上のアドバイスを栄三に示さなかったということは、玉堂はすでに栄三のクリエイターとしての才能を見抜いていたと推測できます。

栄三は、50歳になった昭和31年(1956)、第12回日展に長良川鵜飼を題材にした「篝火」を出品します。それまで栄三は花鳥画を描く傍ら、長良川や金華山、舟伏山といった岐阜の風景を描いていました。長良川の鵜飼を本格的に取材し、日展に出品した最初の作品「篝火」以降、多くの鵜飼にまつわる名品を描き続けました。



鵜 (素描) 加藤東一

兄、栄三に続き東一も昭和54年(1979)頃より鵜飼の作品を発表します。「私は、私なりに子供の頃から間近に見てきたことと、玉堂・青邨先生、そして兄貴らが鵜飼に取り組んでいますから、私も鵜飼というものを何かの形で継承したいな、といった気持ちで鵜飼を描いてきました。」と鵜飼を描くことについて語っています。鵜飼の取材については「鵜飼とか祭りなど人の動きのあるものの場合には目で追っかけないで、動作などを頭の中に印象づけて描く。」と語っています。一場面を切り取って描いただけのリアリティーを感じない作品が多くある中、動きのある題材は輪郭線を追いかけるのではなく、力点や構造を観察するとともに、題材から受ける印象によって作品のイメージを作り上げていきます。

華やかな鵜飼を描いてきた栄三・東一の題材を見つめる厳しい視点と故郷を想う優しさを作品から感じとっていただければと思います。

博物館ニュース

「歴博セレクション 濃尾震災130年
—被災の記録とその伝承」を開催しました

2021.5.29(土)～6.27(日)

明治24年（1891）10月28日に発生した濃尾地震は、近代日本社会が体験した最初の大地震であり、震源地である岐阜県や愛知県を中心に大きな被害をもたらしました。

濃尾震災の発生から130年を迎え、防災対策が重要な課題となっている現在、地元・岐阜に大きな影響を与えた濃尾震災の記録を紐解くことで、地震防災のあり方や地震被害の伝承活動について考える機会を提供する展覧会を開催しました。



【資料1】岐阜市街大地震之図 明治24年
岐阜市歴史博物館蔵

濃尾地震は、地盤の液状化や地割れ、山の崩壊を引き起こすと同時に、完成間もない近代的な建築物や橋梁等の建造物も破壊しました。【資料1】は岐阜の市街地を中心に被害を報道する版画ですが、レンガ造りのステーション（岐阜駅）や、木曾川に架けられた鉄橋が崩れ落ちる様子が描かれています。

こうした被害状況は、新しい情報メディアによって日本国内だけでなく世界中に伝達され、地震の科学的研究や地震防災が始まる契機となりました。また救援・復旧活動では、行政に限らない国内外からの支援活動が見られ、現代につながる民間ベースの救援活動の原型が見られました。

また、濃尾震災の被害を記録する活動は震災直後からみられ、学校単位での震災小誌の作成や記念碑の建設のほか、犠牲者慰霊の場としての震災記念堂建設につながっていきました。



【資料2】記念堂開堂式写真 明治26年
震災記念堂蔵、岐阜市歴史博物館寄託

現在も岐阜市若宮町にのこる震災記念堂は、明治26年震災死亡者三回忌にあわせて開堂しました。その中心人物は、岐阜県出身で震災当時衆議院議員だった天野若圓（1851～1909）。仏教組織を基盤とし、明治23年には愛国と仏教精神の高揚を願って愛国協会（本部：岐阜市）を設立していました。この愛国協会の事業として、濃尾震災で亡くなった人々の追善供養を目的に設立され、令和3年（2021）現在でも、毎月28日には法要が営まれています。本展では、設立やその後の記念事業などの資料を通して、記念堂の歴史と伝承活動についてご紹介しました。

また関連イベントとして、清流の国ぎふ防災・減災センター主催「げんさい楽座」と連携し、講演会「災害の記録から今を知り、将来に備える」（5月29日（土）14：00～16：00）を開催しました。新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、オンラインでの実施となりましたが、岐阜大学流域圏科学研究センター・清流の国ぎふ防災・減災センター 小山真紀さんを中心に、歴史分野だけでなく地域防災や災害史跡のアーカイブス化などに関心を持つ参加者が交流し、現在の減災・防災のあり方について議論しました。

令和2年度受贈資料

令和2年度は、表記の皆様に貴重な資料をご寄贈賜りました。

厚くお礼申し上げます。(敬称略)

尾関 公彦	岐阜市庁舎完成記念品	2セット
石樽 登美子	閑月燈 御切子 変形提灯	1点 1点 1点
波多野 光一	石うす(台付)	1組
若山 晴夫	岐阜商業学校 卒業アルバム(昭和15年)	1冊
今井 宗久	庚申堂 再建修理関係書類 シベリア抑留関係資料	一式 一式
坂口 香代子	おふれ太鼓 歓迎用日章旗(昭和40年岐阜国体)	一式 一式
青山 武彦	市内小学校記念誌等	一式
加藤 好彦	岐阜城再建関係資料	一式

■分館 加藤栄三・東一記念美術館の展示■

本誌4ページで紹介した以外の分館展覧会は以下のとおりです。

・第1展示室

～7月25日(日) (公財)ぎふしん記念財団助成事業 開館30周年記念 加藤栄三・東一記念美術館名品展

・第2展示室

～7月25日(日) 良翠會 一岐阜長良川河畔に集う女流画家たち一

7月27日(火)～9月12日(日) 開館30周年記念 日本画とともに50年 熊崎勝利 日本画展

9月14日(火)～10月24日(日) 一金華百景一 恩田政武 写真展

■特集展示(2階 総合展示内)■

2階の総合展示の一角に特集展示室を設置し、1～2か月ごとにテーマを設けて資料を公開しています。これからの日程は次のとおりです。

～7月25日(日) 江戸時代の系図ブーム

7月31日(土)～8月29日(日) 養老物語絵巻

9月4日(土)～10月24日(日) 岐阜市の発掘調査から

■分室 原三溪記念室の展示■

～8月1日(日) 描かれた鶺鴒Ⅰ

8月3日(火)～9月5日(日) 描かれた鶺鴒Ⅱ(予定)

上記の日程は、都合により変更する場合がございます。ご了承ください。

研究ノート

鮎鮠献上廃止以後の 鵜飼保護政策（前編）

佐藤 友理

はじめに

江戸時代の長良川鵜飼は、江戸幕府や尾張藩による手厚い保護を受けてきた。しかし、鵜飼保護は、将軍家への鮎鮠献上に伴う特権として実施されていたことから、文久2年（1862）に鮎鮠献上が廃止されると、鵜飼保護が維持されるのか危ぶまれることとなる。

拙稿では、鮎鮠献上廃止以後、鵜飼保護政策がどのような経過を辿ったのか、鵜匠家に残る史料から論じていきたい。

1 3つの鵜飼保護政策

（1）諸役免除

尾張藩による長良川鵜飼の保護は、（1）諸役免除、（2）金銭等の援助、（3）鵜飼優先の原則、の3つに大別できる。次にそれぞれについて概説したい。

まずは、（1）諸役免除についてである。近世社会においては、持高に応じて年貢や夫役を負担する決まりとなっていたが、長良鵜匠の場合はこの負担が免除されていたという¹。

これは、藤田民部の、岐阜奉行在任期間である、元和5年（1619）から寛永2年（1625）までの間に決定したことが確認される。

（2）金銭等の援助

次いで、尾張藩による、鵜匠への金銭等の援助については、表にしてまとめたい。あくまで史料から分かる範囲ではあるが、「扶持代」や「御救金」などとして、尾張藩から鵜匠へ金銭等が支給されていたことが分かる。

	時期	内容
ア	宝永4年（1707）から	鵜匠頭へ1人1両2分ずつ「扶持代」を支給 ²
イ	寛延3年～明和元年（1750～64）	鵜匠へ1人4両3分～13両ずつ「御救金」を支給 ³
ウ	文化5年（1808）まで	鵜匠へ1人10両ずつ「扶持代金」を支給 ⁴
エ	文化5年（1808）から	鵜匠12人へ給米120石を支給 ⁵
オ	文化5年（1808）から	鵜匠12人へ餌代192両、篝松代84両、乗組員の給金108両、新鵜購入代金60両を支給 ⁶

（3）鵜飼優先の原則

最後の鵜飼優先の原則とは、宝暦2年（1752）に幕府の勘定奉行が通達した触書に準拠するものである。

この触書は、長良川（郡上郡～安八郡）とその支流において、鵜飼以外の漁法（築、ソジ、網など）により、鵜飼の妨げをしてはいけないとする内容であった⁷。

なお、この触書が出された後も遵守しない地域があったようで、翌年にも同様の触書が出されている⁸。そこでは、「御用鮎鵜漁之妨」となるので、築やソジを取り払うよう命じている。つまり、長良川において鵜飼が他の漁法よりも優先される根拠が、鮎鮠献上という「御用」に因むことが明言されているのである。

この原則は、天保8年（1837）にも幕府の勘定奉行が笠松代官所を通じて、長良川流域の村々へ通達しており⁹、宝暦2年の触書が重視されていたことが分かる。

1 「古記録 写之」（山下家文書Ⅰ 110、『岐阜市史 史料編一』856頁に掲載）。

2 「古記録 写之」（山下家文書Ⅰ 110、『岐阜市史 史料編一』847頁に掲載）。

3 「古記録 写之」（山下家文書Ⅰ 110、『岐阜市史 史料編一』851頁に掲載）。

4 「鵜匠由緒書」（山下家文書Ⅰ 103、『岐阜市史 史料編一』857頁に掲載）。

5 「由緒書」（山下家文書Ⅲ A-14）。

6 「由緒書」（山下家文書Ⅲ A-14）。

7 「古記録 写之」（山下家文書Ⅰ 110、『岐阜市史 史料編一』852頁に掲載）等。

8 「古記録 写之」（山下家文書Ⅰ 110、『岐阜市史 史料編一』854頁に掲載）等。

9 「〔御用留〕」（山下家文書Ⅲ A-6）。

博物館ニュース

総合展示室リニューアルオープン

2019年9月より休業していた2階総合展示室が2021年4月10日よりリニューアルオープンしました。

岐阜市の歴史を紹介する「ぎふ歴史物語」に、大河ドラマ館で好評だった撮影風景のジオラマ模型、甲冑の展示などが加わり、戦国コーナーがより充実したものとなっています。

また、主要説明パネルが5言語表示（日本語・英語・中国語〈簡体字・繁体字〉・韓国語）となり、より多くのお客様にお楽しみいただけるものとなりました。ぜひお楽しみください！



利用の御案内

- **開館時間** 午前9時～午後5時
(歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館の入館は午後4時30分まで)
※特別展開催中は変更することがありますのでご注意ください。
- **休館日** 毎週月曜日と祝日の翌日、年末年始(12月28日～1月3日)
(月曜日が祝日の場合はその翌日)
※特別展・企画展開催中は変更することがありますので、ご注意ください。
- **観覧料** ◎歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館
歴史博物館総合展示、加藤栄三・東一記念美術館(団体は20人以上)
高校生以上……310円(団体250円) 小中学生……150円(団体90円)
両館共通で観覧される場合
高校生以上……520円(団体410円) 小中学生……260円(団体150円)
※特別展は、その都度料金を定めます。
◎下記の方は無料でご観覧いただけますので、①②の方は証明できるものをご提示ください。
①岐阜市在住の70歳以上の人(特別展を除く)
②身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳、
難病に関する医療受給者証の交付を受けている人、及びその介護者1人
③家庭の日(毎月第3日曜日)に入館する中学生以下の方
④③に同伴する家族(高校生以上)の方(特別展を除く)
⑤岐阜市内の小中学生
◎原三溪記念室は、無料でご観覧いただけます。
- **交通案内** <歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館>
JR岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行きに乗り、「岐阜公園歴史博物館前」で下車、すぐ東に歴史博物館があります。
岐阜公園内ロープウェイ乗り場すぐ隣に加藤栄三・東一記念美術館があります。
お車でお越しの際は、岐阜公園駐車場をご利用ください。
詳しくは岐阜市歴史博物館ホームページをご覧ください。
<https://www.rekihaku.gifu.gifu.jp>

<原三溪記念室>
岐阜バス茜部三田洞線 下佐波及びカラフルタウン行きに乗り、「下佐波」で下車、徒歩2分
岐阜バス茜部三田洞線 もえぎの里及び高桑行きに乗り、「もえぎの里」で下車、徒歩すぐ

博物館だより No.108 2021.6

編集・発行 岐阜市歴史博物館

(分館) 加藤栄三・東一記念美術館

(分室) 原三溪記念室

〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1 ☎058(265)0010

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46 ☎058(264)6410

〒501-6121 岐阜市柳津町下佐波西1-15 もえぎの里2階 ☎058(270)1080